先進校に学ぶキャリア教育の実践

地域をフィールドにした活動で自己肯定感醸成に取り組む「探究する学校」

山田高校
（高知・県立）

生徒数の減少とともに、活気が失われつつあった山田高校。
地域と共に課題探究学習を立ち上げ、生徒の自己肯定感醸成をはじめとする効果につなげてきました。
今年度は「探究」を冠した2つの学科を開設し、さらに生徒の可能性を伸ばそうと挑戦しています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

自己肯定感の醸成　地域課題探究学習　総合的な学習（探究）の時間　地域との協働
教員が積極的に外へ　探究科設置　グローバルな課題探究　起業家育成

生徒数減少のなかで自己肯定感の醸成が急務に

高知県中東部にある香美市で80年の歴史を刻んできた県立山田高校。市内唯一の高校として、2019年度まで普通科と商業科の2学科編成で、地域の幅広い子どもたちを受け入れてきた。しかし、近年は急速に進む少子高齢化の影響や、県立高校の通学区域撤廃による都市部への生徒流出などから、入学志願者が減少。最近では入学定員充足率が50％台前半に落ち込んだ年度もあった。

志願者間の競争が失われたことは、入学生徒の多様化を進めた。教員は同校生徒について「素直で真面目」と口を揃える一方で、基礎学力の未定着や、そのコンプレックスが一因となっている自己肯定感の低さといった課題も指摘する。現在校長を務める正木章彦先生は、同校に教頭として着任した5年前、県が実施した生徒アンケートの結果を見て愕然としたという。「自分のことが好きである」「自分という存在を大切に思える」といった自己肯定感に関する項目についての肯定的な回答率が、県平均と比較してそれぞれ10ポイント近く低かったのだ。

「生徒たちを社会に送り出すにあたって、大きな危機感をもちました。チームで仕事をするなかで自分の意見を伝える。やりたいことを自分自身で決め、それに向かってチャレンジする。そして、困難があっても乗り越えようとする――そうしたことの基盤になるのは、自己肯定感ではないかと思います。生徒の可能性は無限大です。高校生のうちに何かしら自信をつける経験が必要だと痛感しました」（正木校長）

「地域の学校」を掲げて総学をリニューアル

こうした課題に対し、同校が打ち出したのが、〝地域の子どもたちを地域と共に育てていく〟ことだ。

発想のヒントとなったのは商業科の実践だった。地域に出て販売実習を行い、地元企業と連携して商品開発にも取り組み、「高校三年生の山田まん」というロングセラー商品を生んだ。そのなかで、成績の良し悪しに関係なく、いきいきと活動する生徒の姿が多く見られていた。

普通科の生徒もそういった輝かせ方ができるのではないか。その経験が生徒の自信を生み、学校全体の活性化にもつながるのではないか。そんな思いから、普通科を含む学校全体として地域連携に舵を切った同校。学校経営の重点項目として「地域で育てる教育」「地域をフィールドにした活動」を掲げ、外部に向けては〝香美市

2016年度に商業科が県内企業と協働し「本物」を目指して商品開発した和菓子「高校三年生の山田まん」。特産の地生姜を使用した独特の風味。県内の土産物店や空港、高知アンテナショップで販売されている。

School Data

1941年設立／普通科・グローバル探究科・ビジネス探究科
生徒数326人（男子130人・女子196人）
進路状況（2019年3月卒業生）
大学44人・短大13人・専門学校57人・
就職20人・その他8人
高知県香美市土佐山田町旭町3-1-3
TEL 0887-52-3151

Outline

校訓「誠実にあれ　誇らかにあれ　貫きてあれ」のもと、教育目標に「知・徳・体をバランスよく養い、地域社会に貢献できる人材を育成する」を掲げ、地域との連携による学びに力を入れている。2020年度にビジネス探究科とグローバル探究科を新設し、普通科と合わせた3学科編成に。平成30年度「第12回キャリア教育 優良教育委員会、学校及びPTA団体等 文部科学大臣表彰」受賞。

グローバル探究科
副学科長
澤田篤志先生

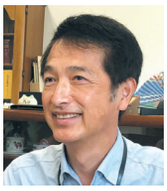
グローバル探究科長
谷内有紀先生

ビジネス探究科長
前田賀代先生

研修企画部長
戎井（えびすい） 淳先生

進路指導部長
宮田敏子先生

教頭
市原庸寛先生



校長
正木章彦先生

立、山田高校と名乗る気持ちをもって地域の学校としての覚悟を示した。

具体的には、まずは生徒会を中心に地域イベントに参加するといった単発的な取組から始めた。そして16年度、総合的な学習の時間を活用した、独自の「地域課題探究学習」をスタート。同じ年に県が始めた地域と学校の連携・協働を支援する「学校地域協働本部」の事業も活用し、それにより派遣された地域連携コーディネーターとの協働で「地域課題探究学習」のプログラムの企画と実践を行ってきた。

地元企業の取材、地域課題の調査…多様な人材が生徒の学びを支援

「チームで協働して地域課題にチャレンジする」を全体テーマとする地域課題探究学習の大まかな流れはこうだ（図1）。

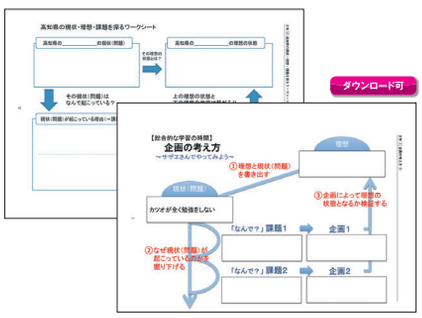
第1学年前期には、地元企業で取材やインターンシップを行ってCMを制作し、インターネットで発信する。後期には周辺市の課題について、地域イベント参加や周辺市役所職員とのグループワークなどを通じて体験的に学び、「高齢者を主としたコミュニティビジネスの促進」や「森林資源を活用した循環型社会の構築」などに関する地域活性化案を市長に提言する。

第2学年では県全体の課題に目を向け、その解決策を考えて県知事や県庁職員に提案を行う。これまで、「人口減少対策として地域に伝わるしばてん踊りで移住を増やす案」や「高知の山と川を活かしたトライアスロンの企画」など、高校生ならではのユニークなアイデアで知事をうなら

図1 地域課題探究学習の流れ

	第1学年前期 地元企業のCM制作	第1学年後期 市長への政策提言	第2学年 県の課題解決策の提案	第3学年 自己の進路について探究
目的	地域を体験的に理解し、つながる。情報収集・編集・発信力を身に付ける	所属や立場を超えたどんな他者とも協働でき、自らの考えに基づいて社会をつくれる人材の育成	課題設定力を身に付け、他者と協働しながら解決策を考え行動できる人材の育成	
活動	クラス内チーム	クラス横断チーム	クラス横断チーム	
主な内容	● 地元企業への取材、インターンシップ ● 広告づくりのプロからCMづくりを学ぶ ● 高知工科大生から動画編集を学ぶ ● 地域発表	● 地元イベントに参加し現状に触れる ● 市の行政担当者との対話 ● 他県の高校生のまちづくり提言の実例に触れる ● 大学生メンターと共に課題設定、調査、解決策検討 ● 市長にプレゼン	● 高知県の課題を知る ● 知事や県庁職員の講演 ● 行政へのヒアリング ● フィールドワーク ● 解決策のアイデア出し（アイデアソン） ● 実地調査 ● 県庁にてプレゼン	

※詳細の設計は学年団によって異なる



ワークシート。課題を深く掘り下げたり、アイデアを形にしたりするなかで随時使用。

ルーブリック。主体性、チームワーク力、社会参加力など8つの力について、5段階で自己評価を行う。

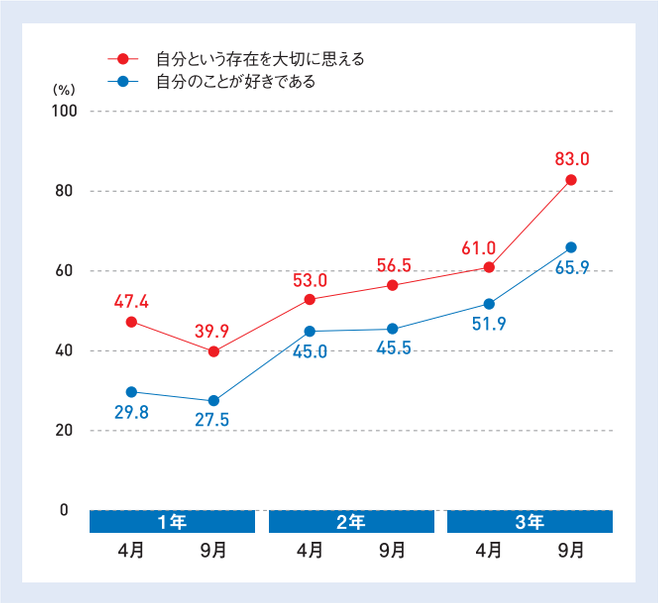
ダウンロード可 ※ダウンロードサイト：リクルート進学総研 >> 発行メディアのご紹介 >> キャリアガイダンス（Vol.434）

地域でのヒアリングやインターンシップを通じて、実体験に基づいて課題の発見に取り組んでいる。

広告代理店プロデューサーから基本姿勢を学び、大学生の協力を得て編集・制作した地元企業のCM動画。

アイデアソン（アイデア＋マラソン）の手法も活用し、大学生メンターと共に解決策を練り上げていく。

図2 自己肯定感に関する生徒アンケートの結果（2017年度入学者）



せてきた。各プログラムはオリジナルのワークシートを使って手順や思考を整理しながら進め、年2回、身に付けたい力についてルーブリックで自己評価を行う。

こうしたチームでの探究活動をベースに、第3学年では各自の進路目標に関連した個人活動につなげている。

学習のプロセスにはさまざまな大人が関わる。県の事業受託により発足した、香美市の市長と教育長、商工会長、市内にある高知工科大学の学長、地元選出の県会議員で構成する「山田高校学校地域協働本部」が核となって、市や県の職員は地域の現状を語り、企業は生徒のインターンシップやインタビューに協力し、大学生はメンターとなってグループ活動をサポートする。教室に外部の人の姿があることが、今ではすっかり日常の風景となった。背景には同校の地道な努力がある。

「我々教員は学校の中で情報を待っているだけではだめ。地域に出て行って、本校を知ってもらうとともに、自分の足で地域の情報をキャッチしてくることが大事です。市や商工会など地域の集まりにはどんどん参加し、アンテナに引っかかる人を見つければすぐ出向いて協力をお願いする。それは管理職の重要な役割だと考えています」（正木校長）

大学進学希望者が増加 自分で考え行動した経験の効果

こうして地域協働の学びを実践するなかで、生徒に変化が見られるようになったという。年2回実施している前述の生徒アンケートでは、自己肯定感を測る「自分が大切」「自分が好き」の2項目の数値が高校生活のなかで上昇していく傾向にある。例えば、地域課題探究学習2期生である17年度入学生では、1年生4月から3年生9月までで2項目の数値がそれぞれ30ポイント以上上昇し、自己を肯定的に捉える生徒が多数派となった（図2）。また、教員が最も手ごたえを感じているのは、進路指導の場面だ。

「地域課題に取り組むなかで、探究する楽しさを知り、さまざまなことに興味をもつようになるようです。進路についても、『もっと学びたい』と大学進学を希望する生徒が増えています」（進路指導部長・宮田敏子先生）

「3年生の面接指導を行っていると、自分が何を学んできたのか自分の言葉で語れる生徒が増えたことに気づきます。机上の学びとは違い、実際に地域課題の現場に足を運び関係者に話を聞くなどした実体験は、言葉の強さに表れるのです。近年の国公立大学合格者の増加とも無関係ではないでしょう」（研修企画部長・戎井淳先生）

地域に支援され自ら突き進んだ「探究する学校」への道

地域連携に対する教員の意識も変化してきた。地域課題探究学習の導入を決めた当初は戸惑いも見られたが、生徒がいきいきと活動する姿に触発され、積極的に取り組む教員が増えているという。今では、「教員は狭い世界の中に閉じこもっていたことを改めて実感。自分自身、多様な人と関わるなかで視野が広がることを楽しむようになった」（戎井先生）、「地域との協働には思うようにいかないこともあるが、生徒と共に私自身も成長させていただき、『乗り越えられない壁はない』と新しいことにも挑戦するようになった」（商業科目担当・前田賀代先生）といった声も聞かれる。

そうした教員の意識の高まりが、同校を次のステージに押し上げた。今年度、学科改編によって、探究をテーマとする2つの学科が誕生。普通科と合わせた3学科編成で、「探究する学校」を標榜して歩み始めた。探究科設置の構想は県の高等学

校再編振興計画の一環で、地域の支援を受けて実現させたものだ。

「入学志願者の減少に歯止めをかけるのは難しく、これ以上の学校の縮小を回避するための抜本的な改革が必要でした。それには、やはり本校が地域と共に実践してきた課題探究学習を軸にしたい。地域の働きかけも大きな力となり、実現させることができました」(市原庸寛教頭)

素晴らしい発表より、探究し続ける力が大切

新設された2学科のうちの1つは、地域だけでなく世界を見据えて課題解決に取り組む「グローバル探究科」だ。主体性・考える力の育成を柱とした独自の教育課程を編成し、専門科目では体系的な探究学習を展開する。

「生徒のやりたいという意志を尊重し、教員は見守る姿勢を大切にしたい。失敗しないように教員が誘導するのではなく、生徒が自分で気づいて対策していくことを待つようにしています」(グローバル探究科長・谷内有紀先生)

「テーマ設定などで揉めるグループがあっても口を出さずにいたら、生徒同士で話し合って折り合いをつけていました。自分たちの力でできるのだと信じて、なるべく生徒の主体性に任せていきたいと思いました」(同副学科長・澤田篤志先生)

もう1つは、商業科を改編した「ビジネス探究科」だ。これまでの商業科での実践を基盤に、これからの地域産業に新たな風を吹かせる起業家の育成を目指して教育課程を再編。起業を意識した探究科目も新たに設置した。

「商業科の実践のなかで気づいたのは、教員が楽しんで取り組むと、生徒も楽しそうに学んでくれるということ。教員も地域の多様な方たちから刺激をいただいて成長できる喜びをもって、これまで以上に生徒がたくさんの人に出会い、コミュニケーションする機会を数多く設定していきたいと考えています」(ビジネス探究科長・前田先生)

そして普通科についても、地域課題探究学習をブラッシュアップし、地域づくりの中心を担う人材育成を一層強く打ち出している。

「ゴールは素晴らしい探究成果を発表することではありません。失敗に終わってもいいから、自分の身のまわりのさまざまなことに興味をもって自ら学んでいける力の一端でも身に付けることを大切にしたい」(戎井先生)

●

新体制となった今年度の入学者は、前年度よりわずかに増加した。香美市内の中学校からの出願率が前年度の2割から3割に増えたことは、「地域の学校」にとっては特に良い兆候といえる。しかし同校が目指す状況にはまだ遠い。今後に向けて市原教頭は、「鉄にクロムとニッケルを合わせることで強く長持ちするステンレス鋼ができるように、探究を中核に3つの学科が三位一体に教育活動を展開することで、地域の学校として新しい価値を提供していきたい」と意気込む。学校の未来は、生徒の未来と無関係ではない。

「生徒一人ひとり、本校でつけた自信をベースに社会で元気に活躍していってくれるのが何よりの願い。それが結果的に、地域の皆さんに『山田高校がないといかん』と愛され続けることになるのではないでしょうか」(正木校長)

今年度については学校再開後、オンラインも活用して地域の人や専門家と交流する機会を確保。感染予防に配慮しながら探究学習を進めている。

図3 山田高校の学科概要(2020年度入学者から)

学科	グローバル探究科	ビジネス探究科	普通科
目指す生徒像	答えが容易に見いだせない問いを立て、自分なりの答えを見いだし、他者を納得させられる表現ができ、卒業後も自ら探究活動ができる生徒	ビジネスに関する探究心を持ち、企業経営者に興味関心を抱かせられる事業計画書を作成することができ、将来、起業家として地域産業の振興に貢献する志を持っている生徒	地域を理解し、地域が抱える課題を認識・発見でき、他者と協働して課題解決に取り組み、将来、地域づくりの中心を担う志を持っている生徒
特徴	専門科目として、1年次「探究リテラシー」、2年次「グローバル課題探究」、3年次「知の探究」を編成し、体系的な探究活動を通して SDGs を意識させるとともに、STEAM 教育に配慮した学習内容を開発。	文献等を通して、起業家に必要な能力やマインドを明らかにしたうえで、それらを身に付けられる専門科目をピックアップし教育課程に編成。ビジネスプランコンテストへの挑戦も目指す。	各教科・科目では社会と自分自身について考えることを大切にするとともに、これまで取り組んできた地域課題探究学習をさらにブラッシュアップ。4年制大学進学から就職まで幅広く対応。

Interview

中学校までの学校嫌いが一変。校内外でのさまざまな挑戦が楽しい

普通科3学年
坂東未来さん

中学生のころ、人間関係に難しさを感じ、学校が好きではありませんでした。しかし、山田高校に入学後、私の性格はがらりと変わったのです。そのきっかけになったのが、総学の地域課題探究学習です。地元企業の方たちの地域や仕事に対する熱い思いに触れ、「自分もがんばりたい」とグループ内でも自分の得意なことから積極的にやるようになりました。そうしたら「あれ？楽しいぞ」と。そこから、先生に紹介された学校外のプログラムにいくつも挑戦してきました。人前で話す経験があまりなかった私ですが、徐々に自信をもってプレゼンできるようになり、今は「自分の思いを聞いてもらうのってすごく楽しい」と思えるように。卒業後は、大学で地域創生についてさらに学びを深めていきたいと考えています。